

# 第1回 あけぼの大豆現地研修会

平成29年8月3日（木）  
身延町あけぼの大豆振興協議会

## 1 今年度の気象状況

関東甲信地方1ヶ月予報（7/27日気象庁発表 7/28～8/28までの見通し）

- 気温と降水量は平年なみ
- 期間前半（7月下旬～8月上旬）は湿った空気の影響を受けやすく、日照時間は平年並みか少ない見込み

## 2 町試験ほ場の試験内容について

（1）安定生産、品質向上に向けた施肥の検討 旧ほ場、新ほ場

### ➤ 目的

大豆（えだまめ）の収量や品質向上のため、肥料の種類や施肥時期の違いによる効果を確認し、あけぼの大豆の特性を活かした施肥を検討する。

### ➤ 試験内容

- 旧ほ場（栽培2年目 22a）→ 主に大豆栽培

肥料の種類（化成13号、石灰窒素、肥効調節型被覆尿素肥料 [LPコート]）、施肥方法の違いによる収量、品質向上の効果確認

1	基肥なし+ 追肥（LPコート）	2	基肥（化成13号）+ 追肥なし
3	基肥（石灰窒素）+ 追肥なし	4	基肥（化成13号）+ 追肥（大粒尿素）

全ての区：合計で窒素成分合計 3kg/10a になるように施肥

- 新ほ場（栽培１年目 15a）→ 主にえだまめ栽培

1	肥料なし
2	基肥（石灰窒素）＋ 追肥（亜りん酸：土寄せ時 2g/m <sup>2</sup> ）

（参考） 亜りん酸 （亜りん酸粒２号 水溶性りん酸 10%）

- ・ 効果：生育促進、粒肥大促進など
- ・ りん酸と比べ、土壌への吸着が少ないため、大豆が吸収しやすい

## （２）摘芯による草丈抑制、収量増加の検討 新ほ場

### ➤ 目的

草丈を抑え、収穫作業（脱莢・脱粒）の効率化を図るための、摘芯（主茎の先端を摘む）の方法、時期及び効果を確認する。

### ➤ 試験内容

摘芯時期（初生葉展開時、本葉５枚頃、開花前）、摘芯なし  
収穫時の草丈、莢数、収量、百粒重、収穫の作業性を調査

## （３）ちりめんじわ発生低減対策の検討 新ほ場

### ➤ 目的

えだまめの莢表面や大豆表面にしわが発生する要因を確認、対策方法を検討する。

表２ しわ粒（子実）の種類

名称	ちりめんじわ	亀甲じわ
特徴	へその反対側の種皮がしわになる	種皮が亀の甲羅状に隆起する。

## 〈しわ粒の発生要因〉

品種、栽培管理、天候、施肥、乾燥など

### ➤ 試験内容

- ① しわ有り、しわ無しをは種し、収穫時にしわの有無を確認
- ② しわが発生する原因の一つである収穫

## (4) 農薬散布の省力化に向けた散布方法検討

### ➤ 目的

農薬散布の労力軽減

### ➤ 試験内容

- ・ 水稻の病虫害防除に使用する鉄砲噴口（永田製作所ステンレスライト K170）を使用し、農薬散布の省力化を検討

## (5) えだまめ、大豆栽培に導入可能な新規品目（作型）の検討

### ➤ 目的

中山間地域であけぼの大豆栽培と組み合わせ可能な野菜品目、栽培法を検討し、地域への普及を図る。

### ➤ 試験内容

#### ● スイートコーン（抑制）

品種：ゴールドラッシュ 90（サカタのタネ）

は種：7/下～8/上 →収穫目標 11/上

3227 黒穴あきマルチ使用 株間 30cm×条間 50cm(3.5 本/㎡)

施肥：基肥 1.5kgN/10a（CDU たまご化成 555 10kg）

#### ● だいこん

品種：冬自慢

は種：8/中～下 →収穫目標 11/上

株間 24cm 条間 60cm（6 本/㎡）

施肥：基肥 1.0kgN/10a（エコ化成 8 号 12.5kg）

### 3 今後の管理について

#### (1) 追肥

- ・ 根粒菌の活性が低下する開花期以降（8月中旬以降）に窒素が必要
- ・ 開花期以後1ヶ月間、茎葉の生長と開花結実を同時に行うため、養分吸収量が大きくなる。
- ・ 土の養分が不足している場合には、追肥の効果が期待できる。
  - 時 期：開花前
  - 施用量：10 アール当たり窒素成分で2kg（NK化成 17号の場合、約10kg）
  - 土壌が乾燥している際は、施用後にうね間かん水をするとう効果が高まる。

#### (参考)

##### 窒素（N）

- ・ 根粒菌の窒素固定は、出芽後3週間頃より始まるため、それまでは土壌中の窒素（元肥等）が必要
- ・ たい肥等を施用し、地力窒素を高め安定的に供給する必要がある。

#### (2) かん水

- ・ 開花期から着莢期、子実肥大期にかけて水の要求量が高く、この時期のかん水により増収の効果が高くなる。かん水はうね間に行う。
- ・ 開花期以降に降雨がなく、土壌が乾燥すると
  - 落花や落莢が多くなる
  - 莢重や子実肥大が低下する。→養分が茎に残り、収穫期に青立ち(茎が枯れない)が発生する。
- 目安
  - ・ 開花から登熟期初期に晴天(降雨が無い日)が7～10日以上続くとき
  - ・ 土が白く乾いて、日中、葉の反転がほ場全体の50%以上見られるとき
- 方法
  - ・ 日照りが続くような時には、5～6日間隔で数回、気温・地温が下がる夕方から

夜にかけて水を入れる

#### (4) 病害虫防除

##### ➤ 病害虫防除の基本～ 早期発見、早期防除

- ・開花が終わり頃から(8月下旬～9月上旬)、<sup>さや</sup>莢を食べる虫(ダイズサヤムシガ、マメシンクイガ等)が増えるため、薬剤散布により防除を行う。
- ・消毒は、7～10日間隔で2～3回、莢及び周辺の葉を中心にていねいに散布する。

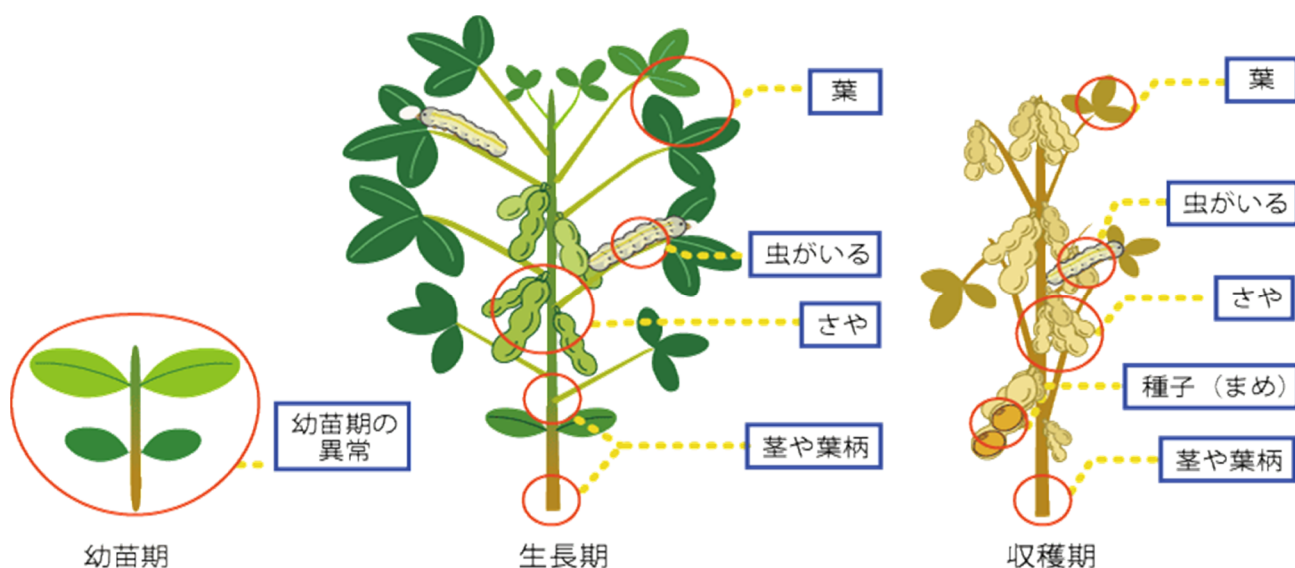


表1 あけぼの大豆(えだまめ)薬剤散布の例

散布時期	薬剤名	対象	使用方法
開花始め (8月下旬頃)	スミチオン乳剤	マメシンクイガ等	1,000 倍・収穫 21 日前・4 回
開花終期 (9月上旬頃)	ゲッター水和剤	紫斑病	1,500 倍・収穫 14 日前・3 回
	トレボン乳剤	マメシンクイガ	1,000 倍・収穫 14 日前・2 回
開花終期 (9月中旬頃)	アミスター20 フロアブル	べと病	2,000 倍・収穫 7 日前・2 回
	トレボン乳剤	マメシンクイガ	1,000 倍・収穫 14 日前・2 回

- ・天候や病害虫の発生状況により、追加散布を実施する。

## あけぼの大豆（えだまめ）の主な病害虫と防除方法

### 1 病害

#### (1) 紫斑病（しはんびょう）

➤ 特徴

- ・ 種子で伝染しやすい
- ・ 葉や莢に紫黒色の斑点



➤ 防除法

- (1) 開花期以降（9月上旬～9月中旬頃）に薬剤を散布する。
- (2) 適期収穫し、早く乾燥する。

#### (2) 白絹病（しらきぬびょう）

➤ 特徴 連作により発生

茎葉がしおれ、枯れる

➤ 防除法

- ・ 発病初期に薬剤を株元に散布（灌注）する。  
モンカットフロアブル 40 1,000 倍 3ℓ/㎡散布
- ・ 水稻との輪作、土壌酸度（pH）を6.5程度に調整、深耕など



### 2 虫害

#### (1) 莢食入害虫 （ダイズサヤムシガなど）

➤ 特徴

- ・ 幼虫または蛹で越冬し、初夏～秋に3～4回発生
- ・ 幼虫が若い葉をつづり合わせて食害し、成長した老齢幼虫が茎や莢（子実）も食害する。



➤ 防除法

- ・ 幼虫が茎や莢の内部に食入すると、薬剤が効かなくなるため、

幼虫のふ化時期～食入開始時期（開花終り）に7～10日間隔で  
2～3回殺虫剤を散布